

聖書朗読への憧れは、私の中で静かに、しかし確実に膨らんでいきました。

2024年の復活祭に洗礼を受け、信徒となった喜びは、私を満たしていました。しかし、同時に、視覚障害のある全盲の私にとって、朗読は『憧れのまた憧れ』でしかないのではないかという思いも湧き上がってきました。朗読は、私をまぶしく照らすのです。

そんな時、神父様の『聖書は単なる書物ではない。朗読は祈りである』という言葉が、私の心を捉えました。それは単なる言葉の羅列ではなく、神への捧げもの、そして信徒の方々への贈り物なのだと教えられました。その言葉を聞いた時、『憧れのまた憧れ』だった朗読が、急に現実味を帯びてきたのです。『私にもできるかもしれない』。そう思った瞬間、胸の奥に秘めていた情熱が、一気に溢れ出してきました。私は、この祈りを込めて聖書を読むこと、そして信徒の方々に心を込めて語りかけることを決意いたしました。

『祈りとしての朗読』に挑戦すると決めたものの、では、一体どうすれば良いのだろうか。私なりの方法を確立する必要がありました。まず、思いついたのは、朗読箇所を丸暗記することでした。それは、聖書を心に刻む大切な作業です。しかし、丸暗記したものをただ読み上げるだけでは、神への祈りとして、また語りかけとして、何か足りないという葛藤が生まれました。

果たしてこれで良いのだろうか。

神様の言葉とは、一体何なのだろうか。

朗読台は遠のいていくばかりでした。

朗読、が『祈り』であるならば、言葉を自分のものにすると同時に、祈りにする必要があります。私が所属する教会では主任司祭の神父様が、福音書を書き写すことを勧めています。全盲の私にとって、書き写す作業は困難を極めます。果たして正確に書き写しているのかも分かりません。それでも、私は書き写すことにしました。聖書を書き写すことは、私にとって、聖書の言葉をより深く理解するための大切なプロセスでした。一文字一文字を丁寧に書き写すことで、聖書の言葉が心に染み渡り、新たな発見や気づきがありました。

なぜその日のミサでその福音の箇所が選ばれているのか、なぜ第一朗読では旧約のその箇所が選択されているのか、詩篇、第二朗読の意味、神様からのメッセージとは何なのかと。最初は言われたから書き写していた聖書。少しそれは私とイエス様の対話と変化し、自らペンを取るようになっていきました。今では、私にとって必要不可欠なものです。

私の心は、イエス様の服に触れたい。

あの出血の止まらなかった女性のように。

群衆を掻き分けて。

自分もそのような気持ちだったのかもしれませんが。

私が朗読を担当するのは不定期ですが、その際には必ず告解を受けるように心がけています。それは、神様の言葉を、私を通して会衆に届けるための責任だと考えているからです。

私は、こうして福音の光に導かれて、聖書の言葉を紡いでいくのです。目が見えなくても。